

# ススヤアカバナ *Epilobium parviflorum* を日本のフロラに追加する

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/00050050">http://hdl.handle.net/2297/00050050</a>

大原隆明<sup>1</sup>・高木末吉<sup>2</sup>・安嶋 隆<sup>3</sup>・源内伸秀<sup>4</sup>：ススヤアカバナ *Epilobium parviflorum* を日本のフロラに追加するTakaaki Oohara, Suekichi Takagi, Takashi Ajima and Nobuhide Gen-nai: Newly distributed *Epilobium parviflorum* in Japan

2002 年 7 月、大原と高木は当時の富山県新湊市（現射水市）でアカバナ属としては大型の見慣れない植物を採集した。その後、2005 年 8 月には安嶋が茨城県東海村で、2006 年 8 月には源内が石川県七尾市能登島においてそれぞれ同様の特徴をもつ植物を見出した。これらの植物は次のような特徴をもつものであった。

多年草。茎は下部でやや木質化し、高さ 80–140 cm、直径は基部で約 8 mm と太く、直立、上部で分枝し、円柱状、開出長軟毛を密生し、上部では腺毛がわずかに混ざる。葉は下部では対生、中部以上では互生する。葉柄はごく短く長さ 0.5–2 mm。葉身は長さ 2–9 cm、幅 0.6–1.8 cm、両面に長軟毛が密生し灰緑色、長楕円状披針形、鋭頭、基部は円形、先が腺に終わるごく低い鋸歯がある。花期は 7 月から 9 月。萼片は長さ 2–3 mm、幅 0.8–1.2 mm、表面に腺毛がやや密生し長軟毛が混ざる。花弁は長さ 4–7 mm、幅 1.5–3 mm、淡紅色。花柱は 4 裂し、最も長い雄蕊とほぼ同じ高さに位置する。子房は長さ 1.5–2.2 cm、腺毛がやや密生する。朔果は長さ 4–5.5 cm、線形、腺毛がやや密生する。種子は長さ 0.8–1 mm、褐色、表面には乳頭状の細突起が密生する。冠毛は汚白色または淡灰白色で脱落しやすい。

日本産のアカバナ属の大半の種では、花柱は分裂せずに頭状または棍棒状であり、既知の分類群のうち花柱が 4 裂する特徴を有するのはエゾアカバナ *E. montanum* L. およびオオアカバナ *E. hirsutum* L. の 2 種のみである（北川 1982；北村・村田 1992；Lievens and Hoch 1999）。このうち、エゾアカバナは草丈が最大で 1 m 以内とやや小型であり、葉身も卵形または狭卵形であるため、今回見出された植物とはかなり印象が異なるものに加え、茎の毛が短伏毛または著しく上方に屈曲した短毛である点で決定的に異なる。一方、オオアカバナは全体が大型で、茎や葉に長軟毛が密生する点で今回得られたものとよく似ているが、オオアカバナは分枝が著しいのに対して、今回確認されたものはいずれも分枝がそれほど多くなく、草姿はかなり異なる印象を受けるものであった（Fig. 1A, 1B）。また、オオアカバナの葉は無柄で抱茎するのに対し、今回確認された植物は葉の基部にはごく短いながらも葉柄があり茎を抱かないことで明らかに異なっている（Fig. 1C）。花部についても、オオアカバナでは花弁は長さ 8 mm 以上と大型であり、花柱は雄蕊よりも高く突き出し裂片が開出するのに対し、今回得られたものの花弁は長さ 7 mm 以下と小型で、花柱は雄蕊とほぼ同じ高さにあって裂片は短く開出しないなど（Fig. 1D）、多くの形質で差が認められた。

上述のように、今回見出されたアカバナ属植物は日本産の既知の分類群とは明らかに異なっていることから海外の文献を調査したところ、Raven (1968)、陳 (1998)、陳他 (2000) の記述や図版により、ユーラシア大陸に広く分布する *Epilobium parviflorum* Schreber であることが判明した。本種は日本の近隣地域では中国中部および東北部に分布が知られている（陳 1998）。サハリン南部のススヤ川河口付近にも記録があり、Nakai (1908) は当時の日本領土内のアカバナ属の整理を行った際にススヤアカバナという和名を与えており、牧野・根元 (1931)、根本 (1936) などの第二次世界大戦以前に発刊された日本のフロラに関する文献に取り上げられている。陳 (1998)、陳他 (2000) は中国以外の産地として日本を挙げているが、これはそれらの文献からの判断と推察される。

大原と高木が富山県射水市で確認した生育地は、潟湖を埋め立てたウキヤガラとヨシが優先する湿草地であるが、同所的に「レッドデータブックとやま」（富山県生活環境部自然保護課 2002）に取り上げられているヒメナミキ（危急種）やカワヂシャ（希少種）や、「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」（環境庁自然保護局野生生物課 2000）で絶滅危惧 II 類（VU）とされているスジヌマハリイが生育するなど植物がよく保存された場所であり、周辺にはコヌカゲサなどの普遍的な外来種が生育しているものの近年侵入したような外来種はみられなかった。また、源内が石川県能登島で確認した生育地はヨシやガマ、アゼスゲと思われるスゲ属植物およびセリが優占する休耕田であったが、やはり「石川県の絶滅のおそれのある野生生物」（石川県絶滅危惧植物調査会 2000）で絶滅危惧 II 類とされているタコノアシ、ハンゲショウが同所的に生育しており、外来種はセイタカアワダチソウ、アメリカセンダングサの生育が確認されたに過ぎなかった。ススヤアカバナの個体密度はかなり高く、200 m<sup>2</sup> に約 100 個体程度と見積もられた。これらの 2 箇所はいずれも海拔は 3 m 以下で海から程近い立地であった。一方で、安嶋が確認した茨城県東海村の生育地は台地の谷間に位置する休耕田で、およそ 2 km 四方の範囲に 8 個体群が点在していた。同所的に生育する植物はガマ、コナギ、モトタカサブrouなどのいわゆる水田雑草が中心であったが、半数にあたる 4 個体群では同属のノダアカバナ *E. ade-*

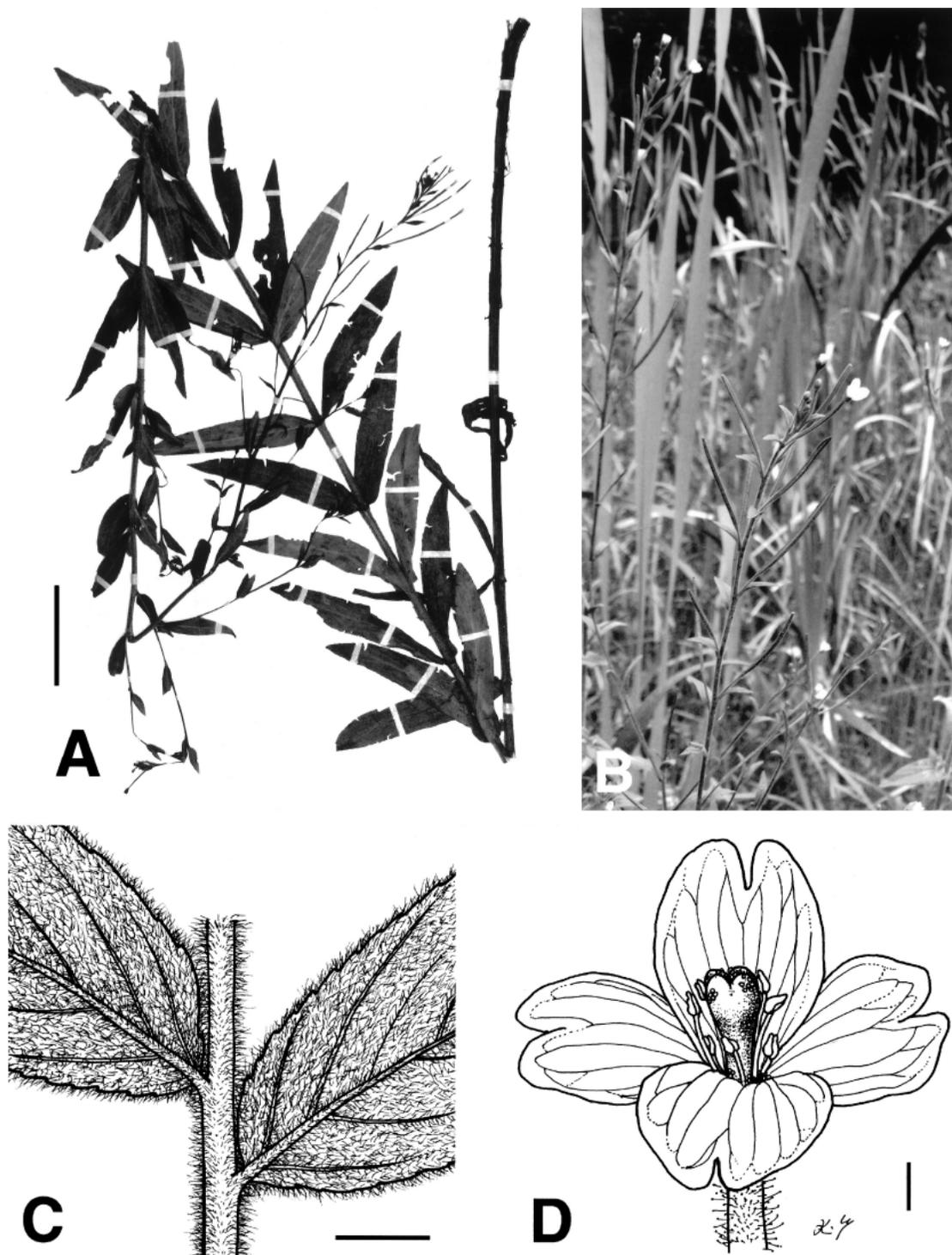


Fig. 1. *Epilobium parviflorum* Schreber. A : Specimen collected in Notojima Island, Ishikawa Prefecture (TYM 15777). Scale : 5 cm. B : Plants with flower in Notojima Island (Aug. 22, 2006). C : Stem and basal part of leaves (Imizu City, Toyama Prefecture). Scale : 1 cm. D : Flower (Imizu City). Scale : 1 mm.

*nocaulon* Haussk. が生育する場所もあった。ノダアカバナは北アメリカ原産の帰化植物であり(天野 2003)、茨城県北部では最近見出される場所が増加している。

今回見出されたスヤアカバナのうち、富山県および石川県のものは生育環境と植生から判断する限りでは人間の活動によって持ち込まれたものとは考えにくい。スヤアカバナに形態、生育環境ともに類似し、世界的にほぼ同様の分布域をもつオオアカバナは本州中部以北に点在する奇妙な分布パターンを示すが、アカバナ属を研究した原寛博士はこの分布を水鳥の移動による散布の結果と考えた(細井 1966)。富山県および石川県のスヤアカバナの場合も、その生育地が水鳥の生息域である沿海の湿地であること、種子に長い冠毛があり羽毛に付着しやすいと推察されることなどから、種子の登熟期である晩秋に大陸から飛来する水鳥によってもたらされたものである可能性が高い。一方、茨城県東海村のものは同属のノダアカバナが同所的に生育することから、スヤアカバナについても帰化が疑われるが、隣接する地域では安嶋が過去にオオアカバナの生育を数年間確認したこともあり、同様に水鳥によって大陸から分布を広げたものである可能性がある。帰化とされるノダアカバナ自体も人間活動に伴う侵入ではない可能性も考えられるため、スヤアカバナとあわせて今後生育環境を含めた詳細な調査を行う必要がある。

なお、上述のスヤアカバナについては証拠標本を作製し、愛知教育大学標本庫(AICH)ならびに富山県中央植物園標本庫(TYM)に収めた(茨城県那珂郡東海村村松, 安嶋隆・村上広美, 2006. 8. 11, AICH; 富山県射水市新堀, 大原隆明・高木末吉, 2002. 7. 6, TYM 15776; 石川県七尾市能登島野崎町, 源内伸秀, 2006. 8. 5, TYM 15777, 15778, 15779; 大原隆明・源内伸秀, 2006. 8. 22, TYM 15780, 15781)。

茨城県での調査にあたっては野口達也氏に貴重なお意見をいただいた。また本稿を作成するにあたっては愛知教育大学生物学教室教授の芹沢俊介教授に有益なお意見をいただいた。図は山本清美氏の手によった。記して感謝する。

#### 引用文献

- 天野 誠. 2003. アカバナ科. (財)千葉県史料研究財団(編). 千葉県の自然史別冊4 千葉県植物誌, pp. 394-405. 千葉県.
- 陳 家瑞. 1998. 柳葉菜科. 李 沛琮・傅 立国・洪 涛(編). 中国高等植物第七卷, pp. 581-613. 青島出版社, 青島.
- 陳 家瑞・万 文豪・陆 尚志. 2000. 柳葉菜属. 陳 家瑞(編). 中国植物誌第53巻第二分冊, pp. 73-133. 科学出版社, 北京.
- 細井幸兵衛. 1966. オオアカバナの新産地—岩木山麓—. 植物採集ニュース **26**: 19.
- 石川県絶滅危惧植物調査会. 2000. 石川県の絶滅のおそれのある野生生物〈植物編〉—いしかわレッドデータブック—. 358 pp. 石川県.
- 環境庁自然保護局野生生物課(編). 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物8植物Ⅰ(維管束植物). 660 pp. (財)自然環境保護センター, 東京.
- 北川政夫. 1982. アカバナ科. 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・巨理俊次・富成忠夫(編). 日本の野生植物Ⅱ 草本離弁花類, pp. 264-269. 平凡社, 東京.
- 北村四郎・村田 源. 1992. 原色日本植物図鑑草本編Ⅱ改訂 58刷. 390 pp. 保育社, 大阪.
- Lievens, A. W. and Hoch, P. C. 1999. *Epilobium*. Iwatsuki K., Boufford D. E. and Ohba H. (eds.). *Flora of Japan* vol. II c, pp. 241-246. Kodansha, Tokyo.
- 牧野富太郎・根元莞爾. 1931. 訂正増補日本植物総覧. 1936 pp. 春陽堂, 東京.
- Nakai T. 1908. *Revisio Epilobii Japonensis in herbario nostri instituti servantur*. *Bot. Mag. Tokyo* **22**: 73-85.
- 根元莞爾. 1936. 日本植物総覧補遺. 1436 pp. 春陽堂, 東京.
- Raven, P. H. 1968. *Epilobium*. Tutin T. G., Heywood V. H., Burges N. A., Moore D. M., Valentine D. H., Walters S. M. and Webb D. A. (eds.). *Flora Europaea* vol. 2, pp. 308-311, Cambridge University Press, Cambridge.
- 富山県生活環境部自然保護課(編). 2002. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックとやま—. 352 pp. 富山県.

(<sup>1</sup>〒939-2713 富山市婦中町上嚮田42 富山県中央植物園; <sup>2</sup>〒933-0223 射水市堀岡348-10; <sup>3</sup>〒313-0071

日立市鹿島町 3-2-1 茨城県立日立第二高等学校；<sup>4</sup>〒926-0204 七尾市能登島長崎町 32-5 <sup>1</sup>Botanic Gardens of Toyama, Kamikutsuwada 42, Fuchu-machi, Toyama 939-2713, Japan ; <sup>2</sup>Horioka 348-10, Imizu 933-0223 , Japan ; <sup>3</sup>Hitachi-Daini Senior High School, Kashima-cho 3-2-1, Hitachi 939-2713, Japan ; <sup>4</sup>Notojima-nagasaki-cho 32-5, Nanao 926-0204, Japan)